

2020（令和2）年度

1日[*]

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十三ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**鉛筆**を使用し、**解答用紙**に記入すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消す**こと。
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

注¹
ブルキナファソの人々は、一九世紀末にフランスに植民地化されるまで、ごく一部の人がアラビア文字を知っていたのを除けば、文字を用いなかった。このことは、植民地ソウシユ国がフランス以外のヨーロッパの国であったり、植民地化の時期が多少異なることはあっても、サハラ以南の大部分のアフリカ社会にもあてはまる。ここでは、話を具体的にするために、サハラ以南のアフリカ社会の中でも、最も長く暮らし、私の主な研究対象でもある、ブルキナファソのモシ社会^{注2}、とくに南部モシ社会について述べる。

研究のはじめの段階では、私はこの社会を「無文字社会」^Aということばで性格づけていた。これは「文字」をもつことを、人類文化の一つのある達成段階と見、文字をもたない社会を、その欠落した「無」という否定的修飾語で規定するものであったといえる。だが、その後彼らの音や身体による表現（そしてモシでは発達していないが、他のアフリカ社会での画像による表現）の豊かさ、自在さについての認識が深まるにつれ、私は彼らの社会を、「無」という欠落によって規定するのではなく、「文字を必要としなかった社会」^Bという、それ自体でのある種の充足を示すことばで性格づけるべきではないかと思うようになった。その詳細は別に論じたので省くが、年のいかない子どもも含むこの社会の人たちの声による言語表現の素晴らしさに接すると、人間にとって、ガンライ言語というものが百パーセント声であり、文字は声による表現の一部分に対応させられているにすぎないという自明のことに、あらためて気づかせられる。

言語表現に限ってみても、文字を用いた教育によって規格化されていない、個性的な自由さが横溢^あしている。この社会の子どもたちが、ノウカンキ^ウの夜のまど^いいで表情豊かに語る昔話の録音を、かつて編集、解説してレコードアルバムとして出したときも、何人もの知人が「声がきれいだね」という感想を伝えてくれた。話すこと、歌うことのプロでも何でも無い、ポロを着て土まみれになってかせいでいる、村のまさにガキや娘っ子が実に素晴らしい魅力的な声の表現力をもっているのだ。みんな学校へも行かず、文字教育も受けていない子たちだ。私はそのとき、学生時代^{注3}、いなせを体現したような浅草花川戸の鳶^{とび}の頭、

故桶田彌三郎さんのお話を、何時間も録音したときのことを思い出した。

うっとりするように歯切れのいい、スピーディーで爽快な東京下町弁のお話を聞きながら、私はこれは文字とは馴染まない音声言語だと思った。日本の仮名文字は母音がはっきりした、近畿地方のことばの、モーラを文字に対応させて作られたのではないかと思った（あるいは逆に、文字が早くから普及したから、近畿地方のことばがモーラ言語になったのか）。事実、あとで現代日本語の研究者と一緒に、この録音を文字化しようとしたとき、私はほとんど絶望的な気持になった。もし、近似的に、このお話で使われていることばをその意味内容から標準語の語彙として理解し、「シ」を「ヒ」にする程度の方言的修正を加えて文字化したとしても、もとの発話を知らない人がその文字テキストを朗読したとしたら、その文字から再音声化されたものは、はじめの桶田さんのお話のことばとは、似て非なるものになるにちがいない。

明治四〇年生まれの桶田さんは、標準語化された現代日本語の読み書きを小学校で習ってはいるが、しかし文字を多く読んだり、文字で自分の考えを書き記すことに馴れているわけではない。サバンナの村で、夜、きれいな個人的な声でお話をしてくれたおばさんや若者や子どもたちとなると、もともと文字を通して音声として標準化されたことばを学校で習ってさえいない。この人たちのことばは、文字とは無関係なところで、躍動している。

私はこの人たちの話すことばを、「文字を用いた学校教育で馴化されていない、アナキーな輝き」にみちていると思うのだが、このことは学校教育がもつ二つの側面を、ことばの問題を通して私に示してくれる。

I

I、学校での文字教育を受けない人たちの声がアナキーな輝きにみち、個人的であればあるだけ、地方語、村語、個人語の性格を帯び、広い範囲には通じにくいものになる。文字は音声言語のとくに超分節的特徴（音の高低、強弱、長短）を消し、主に分節的特徴（子音と母音の継起）によって、あるいは漢字の場合には表意性を対応させることによって、II 声による発話の側面をとりだして「しるす」方法であるから、文字を用いてことばを符牒化したほうが、音声言語の個人差、方言差をこえて通じやすくなる。アメリカ合衆国や中国の音声言語の地方差が、文字を媒介とすればのりこえられることはよく知られている。そのような符牒である文字を用いて言語教育をすれば、音声言語は文字を通して規格化され、広い範囲に通じるものにはなるが、

しかしさきに述べたようなことばの個性と「アナーキーな輝き」は失われることになる。

学校教育、とくに近代国家の義務教育に代表される国語教育の価値指向の一つは、個人や地方ごとの特殊性の殻を破って、一国内で画一的に通じる言語能力を養うところにあるといえるだろう。それは国民国家を維持してゆく上での、不可欠の前提でもある。だがその場合、「通じる」とはどういうことだろうか。《 a 》

母語でない不自由なことばで人と通じ合わなければならぬ、ヨーロッパやアフリカでの生活の長かった私は、「ことばが通じる」ということの重層性を身にしみて感じてきた。

Ⅲ、たとえば、たとえいわゆる文法的に正しいことばで話し合っても、自分の伝えたいことが相手に通じ、相手の言いたいことがこちらに伝わるのには、さまざまな度合いがある。このことは私が長年研究してきたモシ社会の「太鼓ことば」による歴史語りのような、人工的に隠蔽された、

Ⅳ わざと通じにくく

したことばのメッセージにおいては、一層はつきりする。私にとって母語である日本語で話しても、講義や講演の後の質疑応答で、私の伝えなかったことがいかに相手に伝わっていなかったかを知って愕然がせんとすることはよくあるが、そこには当然私の身勝手な思い込みというものもあるであろうから、こうした通じなさの思いは

X なのであろう。《 b 》

V 文字では発信と受信の関係は相互的でなく一方的で、ことばが受信者に通じているかどうかのチェックがない。

声で発せられたことばの超分節性が消し去られているから、伝達の濃こまやかさも減じる。一般に音声言語のうち、音感語（言語音自体の直接の効果が伝達の内容をなすもの）や、表音語、表容語（旧来の用語での擬声語、擬態語）は、文字にしたのでは伝達力が著しく殺ころがれてしまう。他方、概念化を通じて意味の伝達が行われる語は文字化による意味の減殺や変化は少なくともすむ。

伝達における一方性と伝達内容の概念性という文字の二つの特徴からも、文字は国家などの大規模な集権的組織にはきわめて有用なものであり、中央からの指示伝達の徹底のためにも、組織の成員のできるだけ多くの者が文字を読めることが望まれる。一国家一言語で識字教育を徹底することは、近代の国民国家形成の要件であり、標準語の確立と初等教育の義務化が近代国家とともに生まれたことは偶然ではない。

音声言語と比べたときの文字の他の特性として、空間と時間における遠隔伝達性と、メッセージの参照における個別性と反復性、発信と受信における脱時間性（必要なだけ時間をとめて考えたり、メッセージを推敲^{すいこう}できる）が挙げられる。こうした文字の特性からも、抽象的な概念が大きな役割を果たす思想や科学技術の伝達と精練、蓄積においては、文字が決定的ともいえる重要性をもっていることは改めて指摘するまでもない。

だがその一方で、「文字を必要としない社会」は、文字社会が失った多くの貴重なものをもっており、とくに日本のような文字偏重の社会の言語や知識のあり方に対しては、Yな批判の視点を提供してくれる。しかし概念化された知識の精練、伝達、蓄積の面では、文字をもたないことのマイナス面を負っていることも確かだ。《 c 》

学校で文字を使って何をどう教えるかということに、納得のゆく原則が立てられれば、識字率を高め、就学率を上げること、それ自体として否定されるべきではない。ただ、文字化された言語によって教えられるものは、右に見てきたように大きな負^{マイナス}の面と抱き合わせになっている。「文字を必要としなかった」「学校のない」社会が私たちにもたらす教訓を通してゆがみを是正し、いわば文字文化と非文字文化（その二つは、日本のような文字偏重社会にも、層をなして共存している）の特性を、相互補完的に生かしてゆくことが大切であろう。そのようになってこそ、世界の異文化間の交流が意味をもったと私たちはいえるのであろう。

声のうちでも、生物として発する声から、音感語、表音語、表容語を経て、概念化された意味を媒介として伝達が行われる言語の領域へとみてゆくと、生身の人間がじかに発するものの伝達から、「について」の伝達へと、人と人のあいだの伝達もあり方も移り変わっていることがわかる。《 d 》

このうち、声から文字に移しても伝わり方が変わらないのは、概念を媒介とする「について」の伝達だ。それも紙に印刷された文字や、コンピューターの画面の文字ではその度合いがいつそう強められる。それは、伝達における身体性がより希薄なることでもある。《 e 》

対面的関係やスキップの喪失などという表現で、言いつくされたことではあるが、電子的な情報伝達の発達で問題化し

た「バーチャル」な知のあり方の発端は、文字によるコミュニケーションに、さらには、ある音声と、概念化された一定の意味とが文化の約束によって、いわば「恣意的に」結びつけられた概念語による伝達にまで、遡るのだといえる。このことは、「文字を必要としなかった」社会での、音感語、表音語、表容語など、概念化される度合いのより少ない、したがって生きた一人一人の個性的な声での伝達が重要な（この意味で、この種のことばが伝達上果たす役割は、音楽における音の役割に近い）伝え合いの世界に接して考えさせられたことだ。

（川田順造『コトバ・言葉・ことば 文字と日本語を考える』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

注 1 ブルキナファソ——西アフリカに位置する共和制国家。一九六〇年にオートボルタ共和国としてフランスから独

立、一九八四年に国名をブルキナファソに改めた。

2 モシ——ブルキナファソを中心とする西アフリカのサバンナ地帯に居住する民族。

3 いなせ——身なりや振る舞いが洗練されていて威勢がよく、若々しいさま。

4 モーラ——短音節を一拍ととらえる音韻学上の単位。

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ソウシユ

- 1 彼は華道のソウケの出身だ
- 2 スイソウガク部に加入する
- 3 ヒソウな覚悟を固める
- 4 今はまだ時期シヨウソウだ
- 5 大学のソウチヨウに就任する

(イ) ガンライ

- 1 ガンメイな態度をとる
- 2 喜びでハガン一笑する
- 3 借入金のガンボン部分
- 4 ホウガン投げの選手になる
- 5 まったくガンチユウにない

(ウ) ノウカンキ

- 1 毎朝カンブ摩擦をする
- 2 季節外れのカンパに襲われる
- 3 ハツカン作用を促す衣服
- 4 カンキユウのある話し方
- 5 カンセイな住宅街に暮らす

問二 傍線部(あ)・(い)の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 横溢している

- 1 保障されている
- 2 現存している
- 3 濫用らんようされている
- 4 満ち満ちている
- 5 大事にされている

(い) 夜のまどい

- 1 夜ごとに襲う強い不安
- 2 冬の夜更けのまどろみ
- 3 夜を支配する暗闇
- 4 夜明け前の薄明かり
- 5 親しい者同士の夜の集い

問三 五ヶ所の空欄

I

V

のうち、一ヶ所だけ異なる接続語が入る場所として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 I

2 II

3 III

4 IV

5 V

問四

空欄

X

Y

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | 根源的 | 2 | 倫理的 | 3 | 相互的 |
| 4 | 身体的 | 5 | 一方的 | 6 | 消極的 |

問五

本文中の《 a 》《 b 》《 c 》《 d 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

文字をもたない社会における知のあり方が、従来しほしほ「未開」という形容を冠せられて、その実態についての十分な理解がないままに、全面的に否定の評価しか与えられなかったことにも、この点では一面の理がある。

- 1 《 a 》
2 《 b 》
3 《 c 》
4 《 d 》
5 《 e 》

問六 傍線部 A 「無文字社会」から、B 「文字を必要としなかつた社会」へと、筆者が認識を改めたのはなぜか。その説明に合致しないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 文字をもたないモシ社会の人々の音や身体による表現の豊かさや自在さを知ったから
- 2 モシの人々の社会は文字がなくても充ちたりたものであると認識できたから
- 3 モシ以外のアフリカ社会における文字に依拠しない表現の豊かさを理解したから
- 4 文字をもつことは人類文化の発展段階の一つとして当然だと考えたから
- 5 長くモシ社会に暮らす中で言語とは本来文字ではなく声だと気づいたから

問七 傍線部 C 私はほとんど絶望的な気持になったとあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 話している人々自身が学校教育を受けていない場合が多く、言葉が規格化されていないことが多いから
- 2 東京下町弁のことばの魅力は音の高低、強弱、長短などにあらわれ、それは文字化により消滅するものだから
- 3 言語表現の素晴しさが本来声の表現にあるかどうかは、文字を見ただけでははっきり分からないから
- 4 日本の文字は近畿地方の方言をもとに作られており、東京下町弁を表現できる文字は原理上存在しえないから
- 5 規格化されていない自由な言葉はモシの言語表現とは違って明らかに文字化できないことに気がついたから

問八 傍線部 D 「通じる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ある広範な領域内で文字を用いて、一方的で概念的な意思伝達が成立すること
- 2 言葉のもつ超分節的特徴に限定して、一方性を特徴とする音声伝達が行われること
- 3 自分の身勝手な思い込みを回避しつつ、アナーキーな言葉の輝きが伝わること
- 4 音声言語のもつ超分節的特徴と分節的特徴が、文字の力を借りて伝達されること
- 5 画一的に解釈することが不可能な概念内容は、音声言語を用いて伝えられること

問九 本文中の二重傍線部 i ~ ivのうち、傍線部 E 伝達における身体性に合致するものはいくつあるか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 一つもない
- 2 一つ
- 3 二つ
- 4 三つ
- 5 四つ (すべて合致する)

問十 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 ブルキナファソのモシ社会には、日本が近代化の過程で失いつつあるようなアナキーな輝きをもつ方言的表現がまだ息づいている
- 2 文字をもたないということは文化が未開であるにもかかわらず、より豊かな表現をもっているというものの表れでもある
- 3 文字の分節的特徴や表意性によってことばに重層的な意味を与え、より概念的な内容を伝達可能にすることで音声言語の地方差が解消される
- 4 言語による伝達には超分節的側面と分節的側面があるが、学校教育が重点を置くのは近代国家が必要とする後者の側面である
- 5 音声言語の優れている点は伝達における個別性と反復性・脱時間性にあり、この点からも現代では失われた音声言語の復権が望まれる
- 6 「バーチャル」な知のあり方は、音声と意味が文化の約束という論理的必然性で結びついた概念語による伝達によって生じたという一面もある

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

高さは六三四メートル。第一展望台までの移動時間はエレベーターで五〇秒。色は青っぽい。電波塔としての役割を担っている。これらは東京スカイツリーについて現実に成り立っている事柄であり、そして私たちはそうした事柄について語ることができる。しかし、私たちが語ることができるのは、何も現実に成り立っている事柄だけに限られない。もしかしたら成り立っていたかもしれない、つまり可能な事柄や、成り立っていないかもしれない、つまり必然的な事柄について語ることもできる。「スカイツリーはもしかしたらもう少し低く建設されていたかもしれない」、しかし「電波塔としての役割を果たすためにはある程度の高さがなければならぬ」といった具合である。可能な事柄や必然的な事柄について述べるのに、ほかの表現を用いることもあるだろう。たとえば、「スカイツリーは東京タワーに揃えて赤に塗ることもできただろう」、「とはいえ何色に塗られようと何らかの色を伴っているに違いない」というように。

そうした語り方をするとき、私たちは可能性のある範囲のもとで捉えているということにも注意したい。その範囲を超えるような事柄が起こることは不可能なのだ。科学の進歩のおかげで私たちは相当に高いところにもかなりの速さで移動できるようになったが、それでも限界はある。極端なことを言えば、エレベーターのような移動装置が地上から第一展望台まで超光速で移動することは、いくらなんでも不可能だろう。なぜなら注相対性理論が正しいとすれば、そんなことは起こりえないからである。起こることができるのは、相対性理論が認める範囲内の事柄に限られる。超光速でのエレベーターの移動は、必然的に起こらないのだ。なお、現実になり立っている事柄が別様でありうるるとき、その事柄が成り立っているのは I である。だからスカイツリーの高さが六三四メートルであることは、B I と言える。

私たちは必然性についていくつかの種類を区別することができる。その一つは、いま^(ア)述べた相対性理論のような自然法則——この世界における事物が従っていないければならないこと——に関わっている。これは法則的必然性と呼ばれるたぐいの必然性にほかならない。私たちはいまそれに基づいてエレベーターの超光速移動の不可能性について語ったのであり、そして成

り立つたとしても自然法則が破られるわけでない事柄に関して、それが成立する可能性を考えたわけである。可能性の範囲と自然法則の認める範囲を一致させて考えたと言ってもよいだろう。ただし、必然性はいつも自然法則の観点から言われるわけでない。スカイツリーを赤く塗りなおすことはできるだろうが、しかし、その全面を青かつ赤に塗ることは決してできない。色という対象のあり方からして、ある箇所を一度に塗ることができればならないからだ。それは仮にこの世界で成り立っている自然法則とはまったく別の自然法則が成り立っていたとしても、やはりそうでなければならぬ。このように自然法則に関わりなく事物のあり方のゆえにそうでなければならぬ必然性を、形而上学的必然性と言う。

自然法則に関わりがないという点は形而上学的必然性にとって重要であり、この観点からするとエレベーターの超光速移動の可能性について語ることもできる。もし相対性理論とは別の自然法則が成り立っていたとしたら、そのもとはエレベーターが超光速で移動することが許されるかもしれないというわけだ。その可能性は、複数の色を同時に一箇所に塗ることが不可能であるような仕方ではハイジョされない。可能性の範囲が自然法則の認める範囲より広がっていると言うことができよう。そしてもう一つ、論理的必然性である。この世界では様々な事柄が成り立っているが、それらの事柄の成立は論理的な観点から辻褄が合っていなければならない。だからある事柄とその否定が同時に成り立つというあからさまに不整合をきたすようなことは認められず、よってたとえばスカイツリーが東京にあり、Ⅱ、東京にないということはありえないのだ（「赤である」と「青である」が両立しないのは、一方が他方の否定であるという仕方によるのではなく、その点で論理的な不整合ではない）。これはXと言えるだろう。可能性の範囲が最も広いわけである。

必然性、可能性、不可能性、偶然性。これらは様相に関する概念と呼ばれる。たしかに、私たちは様相的な事柄について語る。だがここで注意したい。私たちは様相的な事柄を、私たちがこの世界のなかで経験したことを根拠として語っているわけではないらしいのだ。スカイツリーの高さが六三四メートルであることは、この世界のなかで見たことを根拠として確かめられよう。しかし、スカイツリーの高さがそれより低くありえた可能性は、この世界のどこをどのように見たとしても、確かめることができない。私たちが見ることは、スカイツリーの現実のあり方だけでしかないからだ。よって同様に、ス

カイツリーをどれだけ詳しく見てみても、その高さに関する偶然性を確かめることは無理である。必然性や不可能性について事情は変わらない。スカイツリーは、鉄であれ何であれ、ともかく何らかの素材を用いて作られていなければならない。無によって作られることなどありえないのだ。だがそうした事柄も、この世界のどこかを見れば確かめられるわけではない。

では私たちは、この世界での経験を根拠にしているのだから、いったい何を根拠として様相的な事柄について語っているのだろうか。これが本章で中心的に扱う問いである。ただし哲学者たちはその問いに対して何の手がかりも得ていないわけでない。様相的な事柄についての語りを根拠づけるものの候補を、哲学者たちはすでに手にしている。

Ⅲ 本章では、

その候補について紹介することも狙いとしよう。その候補とは、可能世界と呼ばれる概念装置である。私たちのいるこの世界は現にあるとおりでなく、もしかすると別のあり方をしていたかもしれない。そのようにこの世界がとりえた様々なあり方を、そのまま別の世界とみなすことにする。現実とは違ったあり方をした世界があると考えられるわけだ。そしてそのとき考えられているのが、可能世界にはかならない。

私たちは様相的な事柄について語るのに様々な表現を使っているが、そうした表現の微妙なニュアンスの違いは無視しよう。そしてそれらの表現が共通してもつある形式に注目する。基本となる文に当たる構成要素と、可能性や必然性に当たる構成要素とから成る形式である。基本的な文をPで表わすならば、可能な事柄についての表現は一般に「Pということが可能である」という形式の表現に言い換えることができる。たとえば「スカイツリーの色は赤でありえた」という表現は、「スカイツリーの色は赤であるということが可能である」という表現に言い換えられるわけだ。また同じように、必然的な事柄に関する表現は、「Pということが必然である」と言い換えられることになる。なお偶然的な事柄や不可能な事柄に関する表現は、「Pということが偶然である」および「Pということが不可能である」となるが、それらはさらに可能性と必然性の概念を踏まえて、それぞれ「P、しかしPでないということが可能である」、「Pでないということが必然である」と言い換えることができる。

可能世界は、「Pということが必然である」や「Pということが可能である」という表現が何を意味しているのかをはっきり

りさせるのに利用できる。「Pということが必然である」は、この世界がどのようなあり方をしていたとしてもPが成り立つということである。そこでそのことを、どのような可能世界においてもそのすべてでPが成り立つこととして捉えるのである。たとえば「相対性理論が成り立つ」ということは必然である」という文は、すべての可能世界において相対性理論が成り立つということの意味している。他方、「Pということが可能である」は、この世界が別のあり方をしていたらPが成り立つということであり、それゆえ少なくともある一つの可能世界でPが成り立つということである。たとえば「スカイツリーの高さが六〇〇メートルである」ということが可能である」は、スカイツリーの高さが六〇〇メートルであるような可能世界が少なくとも一つあるということの意味している。

可能性や必然性が関わる文の意味を可能世界にウツタ^{ウツ}えてはつきりさせるというアイデアは応用が利く。たとえば先に可能性の範囲の違いとして区別した各種の必然性を、可能世界の集まりによって特徴づけることができる。まず法則的必然性は、同じ自然法則の成り立つ可能世界の集まりによって特徴づけられる。それゆえある事柄が法則的に可能か不可能かは、当の事柄の成り立つ可能世界がその集まりのなかにあるかどうかによって理解できる。現実^{ウツ}に成り立っている自然法則と同じ自然法則の成り立っている可能世界の集まりを考えると、ここではどの世界でも相対性理論が成り立っているだろう。相対性理論が成り立たず、よってエレベーターの超光速移動が許されるような可能世界は、存在するとしても、その集まりのなかにないのだ。また同様に形而上学的必然性は同じ形而上学的真理の成り立つ可能世界の集まりによって、論理的必然性は同じ論理法則の成り立つ可能世界の集まりによって特徴づけることができる。

可能世界はとても便利な概念装置である。それを利用することで、可能性や必然性に関して私たちが語っていることが何を意味しているのかを、統一された仕方ではつきりさせることができるからだ。だがここで一つ気になることがある。様相的な語りの意味をそうした仕方で明らかにしようとするとき、「可能世界がある」といった言い方をした。「スカイツリーの高さが六〇〇メートルである」ということが可能である」は、スカイツリーの高さが六〇〇メートルであるような可能世界がある、ということの意味する、というふうには。しかし、「可能世界がある」とはそもそもどうということなのだろうか。可能世界というま

るでSF小説にでも出てきそうなものがある、ということ、そのまま受け止めてよいのだろうか。

強調しておくべきであろう。哲学者たちはそのことを真面目に受け止めてきた。哲学者たちにとって、可能世界はある種のリアリティをもった対象である。可能世界はほかの何かによって代わりが利くようなものでない。可能世界が存在するからこそ、様相的な事柄が成立するのであり、そしてその事柄について私たちは語ることができるのだ。哲学者たちによれば、様相的な語りの根拠として、可能世界は存在する。

だがそう主張するのであれば、可能世界とはどのような対象なのかを明らかにすることが課題となるだろう。その課題が果たされない限り、可能世界が様相的な事柄についての語りの根拠として適切であるとは結論できない。

(谷川卓「可能世界」による)

注 相対性理論——ここでは「光の速度は一定で、いかなる物体も光速以上に加速することはできない」という考え方。

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) フれた

- 1 ショクシヨウ気味である
- 2 将来をシヨクボウされる
- 3 友人にシヨクハツされる
- 4 シヨクサン興業を奨励する
- 5 疑惑をフツシヨクする

(イ) ハイジヨ

- 1 ハイシヨク濃厚な試合
- 2 強敵にクハイを喫する
- 3 古い考えをハイゲキする
- 4 旧来の規制をテツパイする
- 5 味方を裏切るハイシン行為

(ウ) ウツタえて

- 1 意思のソツウを図る
- 2 ソセイ濫造らんぞうされた製品
- 3 カソ性の高い建築資材
- 4 社長にジキンする
- 5 ビルのテイソ式を行う

問二 二ヶ所ある空欄 I に共通して入る語として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 継起的
- 2 想起的
- 3 相互的
- 4 偶然的
- 5 論理的
- 6 一面的

問三 空欄 II ・ III に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- 1 かつ
- 2 しかし
- 3 そこで
- 4 つとに
- 5 ところで
- 6 なかんなく

問四 傍線部 A 私たちが語ることができるのは、何も現実^{に成り立っている}事柄だけに限られないとあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 現実^{に成り立っている}事柄について、そうであつたかもしれない事柄やそうであるべき事柄などの様々な可能性の範囲を考慮しながら思考することができるから
- 2 ある事柄について、自然界の普遍的なルール^{のよ}に則^つているか、論理的な整合性を満たしているかなどと考えることによつて、その事柄が成り立つ範囲はおのずと変化^{する}から
- 3 ある事柄について、その事柄が成立したり発生したりする可能性を現実^{に成り立っている}自然法則に求め、可能な事柄と不可能な事柄の範囲を定めようとするから
- 4 自然法則に反するような事柄については形而上学的に、形而上学的に成り立ちえない事柄については論理的にという順序で、複数の概念的な範囲を用いて思考しているから
- 5 ある事柄が起こる可能性の根拠に法則性や論理性など様々な範囲での必然性を置き、現実世界での経験上必然的に成り立つ様相を定めようとする思考の方向性をもっているから

問五 傍線部B スカイツリーの高さが六三四メートルであること、傍線部C スカイツリーを赤く塗りなおすこととあるが、

これらについてのa～eの記述のうち、本文の内容に合致するものはいくつあるか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- a スカイツリーの高さが六〇〇メートルであった可能性は、法則的必然性にも形而上学的必然性にも反しない
- b スカイツリーの高さが六三四メートルかつ六三四メートルでない可能性は、論理的必然性に反する
- c スカイツリーを無色透明な素材で建設できる可能性は、論理的必然性にも形而上学的必然性にも反しない
- d 赤色と青色のスカイツリーが別個に存在する可能性は、論理的必然性にも形而上学的必然性にも反する
- e 高さが七三四メートルで赤いスカイツリーが電波塔の機能をもたない可能性は、法則的必然性に反する

- 1 一つもない
- 2 一つ
- 3 二つ
- 4 三つ
- 5 四つ
- 6 五つ（すべて合致する）

問六 空欄 X に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ここまで述べてきた三つの法則的必然性のうち、私たちににとって最も理解が容易だ
- 2 ある人物が、A地点とB地点に同時に存在することができないのとは異なる
- 3 可能性について語ろうとするとき、必要かつ十分な要件である
- 4 次に述べる可能世界という概念装置の構成要件としては必要がない
- 5 どのような事柄の可能性を語るにしても、最低限踏まえているはずの必然性

問七 傍線部 D 可能世界と呼ばれる概念装置 とあるが、これについての筆者の考えに合致しないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 様相的な事柄の語りを根拠づけるものの候補として、経験の代わりに手にしたものである
- 2 現実世界には他にとりえた別のあり方があるのだと考えるときの「あり方」のことである
- 3 必然性や可能性を示した表現が意味するものを明確化するときを使うことができる考え方である
- 4 可能世界の集まりを考えると、可能性の範囲の違いである各種の必然性の特徴を明確にできるものである
- 5 空想的な存在のようであるが、哲学者にとっては私たちのいるこの世界を語るために欠かせないものである

問八 傍線部 E 「Pということが偶然である」、傍線部 F 「Pということが必然である」を言い換えたものとして最も適当なもの

ものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- 1 Pでないということが偶然でない
- 2 Pでないということが不可能でない
- 3 Pでないということが可能でない
- 4 Pであるということが可能であり、かつ、Pでないということも可能である
- 5 Pであるということが必然であり、または、Pでないということも可能である
- 6 Pであるということは不可能であり、ときに、Pでないということも可能である

問九 次に引用した文章と本文（谷川の文章）とに共通する内容として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

私たちが学校で「数」を学ぶ仕方を考えてみましょう。小学校で足し算や掛け算を習い、中学校で三平方の定理や因数分解を習い、高校で微積分を習う。そのさい、もつぱら数がどんな計算に役立つのかとか、ある数に対する別の数の関係とか、ある数の体系から別の数の体系を導き出すとかいうことばかりに習熟させられて、そもそもいったい数とは何なのか、それは何を表わしているのか、ということとはついぞ習わなかったのではないでしょうか。そう、数とは何かということとは、いまだに哲学者や数学者の意見の一致を見ていない難問なのです。

可能世界についても同じことが言えます。（三浦俊彦『可能世界の哲学 「存在」と「自己」を考える』による）

- 1 可能世界を概念装置として様相を語れるのは哲学者だけであり、私たちは表面的な理解にとどまっている
- 2 可能世界を様相的な事柄の語りの根拠として認めない哲学者もおり、他の語りの可能性も模索すべきである
- 3 可能世界は様相的な事柄を語る概念装置として利用されながらも、どのようなものは明らかにされていない
- 4 可能世界について専門家間で意見の一致をみなければ、必然性や可能性について語る根拠として適切ではない
- 5 「数」について意見の一致が見られないように、可能世界の有無について哲学者たちの意見は分かれている

問十 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 まさに現実として成立している事柄にとどまらず、可能的な事柄や必然的な事柄についても、私たちはその可能性や必然性が成立する範囲を定めながら語っている
- 2 法則的必然性は、可能性を考える際の範囲が現実存在している自然法則であるので、いかなる事柄の可能性を考える場合にも満たされていなければならない
- 3 目の前の現実について、これが必然的なものでないとわかって可能性や偶然性について語る場合でも、その語りの根拠を現実世界に求めているわけではない
- 4 「スカイツリーの色が赤である」ということは不可能である」という文は「スカイツリーの色が赤でない」ということが必然である」という文と同じことを言っている
- 5 相対性理論に反する事象が起きる可能世界は存在しうるし、その可能世界において「相対性理論が成り立つ」ということは必然である」と言うこともできる
- 6 哲学者たちは、可能世界という概念装置を様相的な事柄を語る際の根拠として有効なものと考えているが、そう結論づけるには議論すべき点が残されている

国語解答用紙 1日【*】

一

問一	(ア)	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●
(イ)		
① ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●		
(ウ)		
① ● ② ● ③ ● ④ ●		

問二	(あ)	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●
(い)		
① ● ② ● ③ ● ④ ●		
問三		
① ● ② ● ③ ● ④ ●		

問四	X	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●
Y		
● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●		
問五		
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●		

問六	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●
問七	
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●	
問八	
● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●	
問九	
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●	

問十	● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●
----	--------------------------------------

二

問一	(ア)	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●
(イ)		
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●		
(ウ)		
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●		

問二	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●
問三	
II	● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●
III	
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●	

問四	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●
問五	
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●	

問六	① ● ② ● ③ ● ④ ●
問七	
● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●	

問八	(E)	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●
(F)		
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●		
問九		
① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ●		

問十	① ● ② ● ③ ● ④ ● ⑤ ● ⑥ ●
----	--

50点

50点